

# ヴォルフガング・J・モムゼンと 「修正主義的」ナショナリズム研究(2)

今 野 元

## (3) 帝国主義研究

ヴォルフガング・J・モムゼンの帝国主義研究は、彼のナショナリズム批判の一環として行われたものであり、以下のような特徴を有している。(1)モムゼンの帝国主義研究を突き動かす問題意識は、第一次世界戦争に、最終的には第二次世界戦争にまで繋がった国民国家同士の激突が、一体如何にして生じたのか、とりわけドイツ帝国がどのような役割を果たしたのかというものであった<sup>1)</sup>。近代史家モムゼンの関心は、とりわけビスマルク期後半から第一次世界戦争勃発までの欧州列強の動向に集中することとなった。(2)モムゼンの帝国主義研究は、ヴェーバー研究の発展版という側面がある。1960、70年代のモムゼンにとって、博士論文で扱った政治評論家ヴェーバーの主張、あるいは『経済と社会』における国民国家論が、帝国主義理論史においてどう位置付けられるのかは重要な関心事であった。ヴェーバーへの興味は、モムゼンの帝国主義研究の随所に現れている。(3)モムゼンは帝国主義研究を通じて、ドイツだけでなく、不可避的にイギリス、フランス、アメリカ、ロシアなどの帝国主義とも向き合い、国史学の垣根を乗り越えた比較政治学の境地に達した。ドイツ政治史から比較政治史へという展開は、ヴィンクラー、ヴェーラーにも見られた現象である。更にモムゼンはエジプトなど中東情勢にも理解を深め、伝統史学における「ヨーロッパ中心主義」を批判した。ただ、そうした視野の本質的拡大にも拘らず、ドイツ史家としてのモムゼンが最後まで「ドイツ特有の道」批判に固執し続けたというのは、興味深い現象である。

ドイツ史家だったヴォルフガング・J・モムゼンの帝国主義研究における第一歩は、意外にもエジプト研究から始まっていた。ヴェーバー研究を刊行して僅か二年後の1961年、モムゼンは『エジプトとヨーロッパ帝国主義——エジプト国民運動の勃興』を刊行している。アラビア人、トルコ人に征服され、少数のコプト教徒を除いてイスラム化されたエジプト人が、

ナポレオンの遠征後はイギリス人、フランス人の二重支配のもとに置かれ、高揚した国民運動も鎮圧されてイギリス支配下に置かれた経緯を、モムゼンはこの小冊子で雄渾に描いている。この著作は『ヤヌス叢書』という新書で、文献一覧のみで出典註のない啓蒙的なものだった<sup>2)</sup>。こうして中東を舞台とした帝国主義を考察したモムゼンは、のち1975年創刊の歴史学雑誌『歴史と社会』で初めて編集を担当した際には、前年開催の第三〇回歴史家大会の分科会を生かして「中近東の帝国主義」という特集を組み、「伝統的な歴史的思惟の一面的にヨーロッパ中心主義的な方向性の克服」を『歴史と社会』の「本質的課題の一つ」と明言しつつ、オスマン＝トルコ帝国研究者を3人、イラン研究者を1人採用している（ちなみにこのモムゼン初編集の『歴史と社会』で、ニッパードイグがヴェーラー『ドイツ帝国』を徹底批判した書評を発表し、モムゼンを含めた「ドイツ社会史派」に宣戦布告をしているのは、不思議な因縁である<sup>3)</sup>）。

ヴォルフガング・J・モムゼンの帝国主義研究で、ドイツ・ナショナリズム研究との連続性を比較的強く示すのが、『フィッシャー世界史叢書』の一つとして書かれた『帝国主義の時代』(1969年)である<sup>4)</sup>。この書名は、モムゼンが繰り返し引用する同時代人ハインリヒ・フリートユングの著作<sup>5)</sup>に由来するものである。モムゼンはこの著作で、西欧諸国(英仏)からロシアまで、1885年から1918年まで幅広く論じており、以下のような点で特筆すべきものがある。(1)「内政の優位」世代のモムゼンは、外的現象には内的原因があるという発想に固執しており、章立ても各国内における政治的・経済的・社会的発展と、各国間のナショナリズムの急進化、帝国主義の進展と戦争の勃発とが交互に扱われている。(2)けれども、内的要因と外的現象とがどのような因果関係で結び付いているのか、その筋道は明示されておらず、またホブソンやレーニンの帝国主義理論も参考程度に紹介されているだけで、それに直接依拠した記述にはなっていない。内政と外政とが交互に論じられているのも、羅列的な感じが否めない。(3)モムゼンは経済還元主義を採用しておらず、国内事情として「政治的イデオロギー」など思想的潮流を重視する姿勢を示している。この点はヴェーバー研究の影響とも思われ、モムゼンがのちに発展させるヴィルヘルム期知識人研究にも繋がっていく特徴である。(4)各国の政治発展を論じる際は、「デモクラシーの支配形態の普及に関する西から東への明白な勾配」<sup>6)</sup>が指摘されている。これは決して誤った指摘ではないが、その「勾配」に相応す

る事実だけが披瀝されるならば、西欧（とりわけイギリス）中心のオリエンタリズムということになる。実際その傾向が顕著なのがロシアに関してで、「西欧的模範」に照らした「表見的立憲主義」というヴェーバーの概念がそのまま使用され、オットー・ヘッチュの批判は考慮されていない<sup>7)</sup>。

ヴォルフガング・J・モムゼンの帝国主義研究は、こののち一般理論の整理へと進んでいく。その成果は、イギリス滞在を踏まえて刊行された『帝国主義理論』<sup>8)</sup>である。帝国主義に関する諸理論の変遷を概説したこの著作は、1970年にアムステルダム大学で行われた講義、あるいは本務校デュッセルドルフ大学での授業を基にしたものであった。加えて1971年から翌年にかけて、モムゼンがオクスフォード大学セント・アンソニー・コレッジに滞在し、イギリスの帝国主義理論研究から刺戟を受け、とりわけロナルド・ロビンソンと対話したことが重要な契機となっていた<sup>9)</sup>。この著作の目的は飽くまで先行理論の吟味であり、モムゼン自身による帝国主義理論の展開ではなかったが、それでもそこには彼の個性が読み取れる。(1)ドイツ帝国研究でもそうであったように、モムゼンは帝国主義が「その時々の支配層」(jeweilige Herrenschichten)による国内矛盾の回避策であるという機能主義的解釈に固執しており、この点を指摘する帝国主義理論を高く評価する傾向にあった。モムゼンがジョン・アトキンソン・ホブソンに特に注目するのはそのためであり、本質的には時代遅れとなったとするヨーゼフ・シュンペーターの理論を尚も高く評価したのも同様の理由からだった<sup>10)</sup>。(2)モムゼンの帝国主義研究はナショナリズム研究の一発展形態であったが、帝国主義を単に「極端なナショナリズム」と定義する新潮流には、背後にある原因が未解明だと頗る批判的で、帝国主義を積極的に特定階級に奉仕する「機能」を有したイデオロギーと解釈するべきだと説いている<sup>11)</sup>。(3)帝国主義の原因を国内的要因に見るモムゼンの発想法は、マルクス主義系の帝国主義理論を想起させるものだが、モムゼンはマルクス主義の独創性をその都度低く評価し、「ブルジョワ」陣営に発想の起源があることを強調している。これはモムゼンの東独歴史学への厳しい態度とも連続する、看過できない特徴である。モムゼンはレーニンの帝国主義論がホブソンやドルフ・ヒルファーディングに大幅に依拠していたことを指摘しており、またマルクスに影響を与えた先人にジョン・スチュアート・ミルやヴィルヘルム・フリードリヒ・ヘーゲルがいたことを強調する<sup>12)</sup>。「共産主義世界で聖典となった」レーニンの帝国主義論へのモムゼ

ンの評価は厳しく、資本主義の柔軟性を過小評価したとしている<sup>13)</sup>。なお執筆当時「新左翼」を魅了していた毛沢東主義については、帝国主義に関する独自の理論的貢献を疑問視し、その実践中心主義が暴力に繋がることを指摘している<sup>14)</sup>。(4)東欧やアジアのマルクス主義理論には消極的なモムゼンだが、西側のマルクス主義系理論には大いに興味と共感を示している。モムゼンの興味は、ロナルド・ロビンソンらの「自由貿易帝国主義」(非公式帝国主義)論、ポール・スウィージーらの「国家独占資本主義」論、ディーター・ゼングハースらの「従属」(dependencia)論、ヨハン・ガルトウングの「構造的暴力」論、イマニュエル・ウォーラーステインの「世界システム」論などへと次々に広がっている<sup>15)</sup>。

ヴォルフガング・J・モムゼンは前述のように帝国主義研究に取り組む過程で、国内要因が帝国主義を規定する重要な要因であるという発想に固執したが、経済的潮流から政治過程を直接説明しようとする議論には距離を置いていた。1971年、モムゼンは第二八回歴史家大会である分科会を生かして、編者として『近代帝国主義』を刊行している。この分科会はハンス＝ウルリヒ・ヴェーラー、ヘルムート・ベーム、ヴォルフガング・シーダーら「内政の優位」の発想を共有する「ドイツ社会史派」世代がアメリカ、ドイツ、イタリアなど各国の近代帝国主義を比較するという試みで、帝国主義という現象の経済的起源を強調する立場(ヴェーラーのアメリカ帝国主義論)と疑問視する立場(仏人ジルベール・ジブラのフランス帝国主義論)とを対比させてみせた<sup>16)</sup>。1977年、モムゼンは史料集『帝国主義——その精神的・政治的・経済的基礎』を刊行し、欧米各国への幅広い知識を示している。この史料集は当時の演説、評論、声明、書簡など思想的史料(そこにはマックス・ヴェーバーの講演や政治評論が三つ含まれている)が、頁数にして統計的資料の六倍も掲載されており、モムゼンが「精神的」基礎を最重要の要因としていることを明示し、帝国主義の経済的起源を強調するヴェーラーとの違いを示した<sup>17)</sup>。ヴェーラーとの相違点は、1977年刊行の論文集『ヨーロッパの帝国主義』に掲載されたヴェーラー『ビスマルクと帝国主義』の英語書評で顕著に表れている<sup>18)</sup>。ここでモムゼンは、ヴェーラーが煩雑なほどの史料を用いて証明しようとしたテーゼ、つまり1873年の経済危機、1883-86年の景気後退でドイツ社会に、ドイツ経済のために海外市場が必要だという「イデオロギー的共通理解」が広まっていたという、経済から政治への社会心理的架橋論が、実際には

実証不能であると指摘したのである。これに対してビスマルクの植民地獲得が、実は自由主義的デモクラシー勢力の防圧という内政上の理由によるものだったというヴェーラーの主張については、モムゼンもこれを肯定した。ただその場合でも、ビスマルクの帝国主義は「ボナパルティズム的独裁」の維持の道具、「操作」的な「社会帝国主義」だったというヴェーラーの解釈については、これに同意することができなかった<sup>19)</sup>。冷戦後、モムゼンは『プロピレーエン・ドイツ史叢書』でドイツ帝国部分を担当し、ビスマルク期からヴィルヘルム期にかけての「世界政策」についても概説しているが<sup>20)</sup>、ここでも特にビスマルクの植民政策が国民自由党内の親政府勢力を意識したものであったことを強調している<sup>21)</sup>。

### 3. 評価

(1) 比較ナショナリズム研究におけるW・モムゼンは、具体的根拠を十分明示しないまま歴史叙述を展開してしまう嫌いがあった。モムゼンは「ドイツ特有の道論」の代表者として、「西欧」の正常な発展を指摘するが、「西欧」史の史料・文献に綿密に当たっているわけではない。例えばモムゼンが固執する、フランスの「主観的」国民概念、フランス国民国家の順調な発展というテーゼも、それは19世紀フランスの君主制と共和制との間での激しいブランコ運動や、バスク、ブルターニュ、アルザス＝ロレーヌなど民族的少数派の歴史を踏まえてのものとは、文面から到底思えない。それはドイツ「国民」の後進性、問題性を際立たせるために大胆に構成した戯画に過ぎないのである。「西欧」が模範的だという点に、具体例による論証など不要と考えているかのようである。これはヴェーラーであれヴィンクラーであれ、「ドイツ特有の道論」の論客に共通する特徴である。「西欧は正常で模範的」という彼らの信念は、個々の瑣末な事例では譲れても、大局的にはどうしても譲れない価値的前提であり、そこに批判のメスを入れることは有り得ないのである。「ドイツ特有の道論」の理想化された「西欧」観の甘さを突いた「イギリス社会史派」の批判は、モムゼンも認知はしているが、それが彼の研究姿勢を大きく変容させることは全くなかったと言ってよいだろう。

W・モムゼンは、西欧研究に従事したことがないわけではなかった。帝国主義研究はモムゼンに、ドイツ近代史を越える幅広い視点を与えていた

のである。しかしモムゼンの幅広い帝国主義への興味は、近代ドイツに関する彼の見方を根本的に変えることはなかった。それは「ドイツ特有の道論」が、モムゼンにとって実証史学に基づく学問的な結論ではなく、ドイツ連邦共和国の国家理性に起源を発した、あるいは彼の時代体験に根差した政治的な確信だからであろう。

(2) W・モムゼンは、「文化国民」(Kulturnation)という概念に関して相反する二つの方針を採っているように思われる。モムゼンにとって、文化という「客観的」基準で団結するネイションは、自由やデモクラシーへの忠誠心という「主観的」基準で団結するネイションより、問題含みのものだった(ちなみにモムゼンにおいては、言語と出自とが無造作に「客観的」要因としてまとめられている)。この文脈では、「文化国民」はドイツの後進性の象徴として批判的に紹介されている。けれどもモムゼンは、別の文脈ではドイツ「文化国民」の意識を積極的に涵養せよと述べている。つまりモムゼンはビスマルク帝国のドイツ国民国家としての不完全さを強調する際に、「エステルライヒのドイツ人」の排除を問題視しているのだが、これは自分が批判する「客観的基準によるネイション観」を自ら動員していることになるのである。モムゼンはビスマルク帝国の「未完成の国民国家」ぶりを強調する文脈では、かなり無造作に「ドイツ文化国民」を語る傾向にあると言える。

(3) この「ドイツ文化国民」にも表れているように、W・モムゼンはネイションが実体だという前提で考えている。これは、1980年代のネイション「脱構築」論者の影響を受けて、ネイションを虚構視するようになったヴェーラーや日本の数多のナショナリズム批判者とは異なる点である。モムゼンがネイションを実体視することは、彼が負の過去の担い手としてのドイツ国民の存在を必要としていること、また彼がドイツ「文化国民」の概念を肯定的に用いていることと無関係ではないだろう。

ちなみにW・モムゼンは、西ドイツをドイツ「文化国民」の諸国家の代表と見ているが、これは彼が東ドイツの存在を否定的に見ていることと密接不可分である。モムゼンは西ドイツ輿論のイギリス批判を不当な思い上がりだと叱責するが、東ドイツ、エステルライヒ、ドイツ系スイスを「ドイツ文化国民」内の二級国家と見ることは思い上がりではないのか、という問いには答えていない。

(4) 一般に言ってW・モムゼンには、ナショナリズム、ネイションとい



う分析対象から距離を置き、冷静な態度で分析しようという姿勢が見られない。ナショナリズム、ネイションの問題性を指摘するという態度は、モムゼンには譲れないものであった。1970・80年代のモムゼンは、西ドイツ人に再統一の断念を唱導する「教壇預言」に邁進していた。すでに見たようにH-U・ヴェーラーの場合、ナショナリズムという概念を——「専門家の国際的議論では長いこと普通になっているように」——「可能な限り中立的に」用いると宣言していた。ヴェーラーのナショナリズム分析は、実際にはその「中立」性を維持していないが、少なくとも本人は主観的にはそう努力しているつもりだったのである。しかしモムゼンの場合、そもそもそうした宣言自体が見当たらない。そのためか、nationalistischやimperialistischといった言葉が、如何なる定義もなく、nationalとの違いの説明もなしに、否定的、軽蔑的な表現として再三再四使用されている。

(5) モムゼンは東ドイツが正統性の欠如した国家であることを強調し、西ドイツが「ドイツ文化国民」の代表だと述べて躊躇わないが、にも拘らずブラントの東方政策を肯定して、東ドイツ国家の存続を積極的に肯定するというのは、ある意味矛盾しているようにも思われる。東ドイツに西ドイツとは別な、何らかの価値を認めるのならば、東ドイツの存続を支持するそれなりの理由になることだろうが、東ドイツに何ら肯定すべき点を見ないのに、その存在に固執するというのは不可解な論理である。それはつまり、ドイツ東西分断の固定化に道義的必要性を感じていたということだろう。

(6) W・モムゼンの議論では、彼個人の規範意識が余りに強いために、論理が飛躍している面がある。モムゼンは、ビスマルク帝国を念頭に置いた国民国家意識が反ヨーロッパ的性格を有し、「我々」(=西ドイツ国民)にとって問題のあるものだと述べ、それが「説得力を失った」と書いているが、これは整合しない議論である。一言論人として「説得力を失うべきだ」という規範論を唱えることは可能だが、本当にそれがすでに事実として「説得力を失っ」ているのなら、モムゼンがここで躍起になって否定する必要はないはずである。ビスマルク帝国を忘れられない同時代人への反感の余り、つい力んで「説得力を失った」と断定してしまったというのが、実際のところではなかろうか。それにドイツ国民国家の地理的輪郭を観念する際、ビスマルク帝国のそれを基準にすることが、「官憲国家」や「上からの革命」といった内政上の状態を肯定することに繋がるとモムゼンが

考えているのは、短絡した議論であると思われる。

(7) ネイションを実体視していることにも現れているように、W・モムゼンは、ベネディクト・アンダーソン、アーネスト・ゲルナー、エリック・ホブズボームらアングロ＝サクソン圏左派知識人のナショナリズム理論を鵜呑みにするところがない。西欧主義的価値観は明らかに前提とされているが、ナショナリズム研究において西欧から「学習」しようとした形跡はないのである。これはヴェーラーと比較した大きな違いである。もっともモムゼンが、アングロ＝サクソン圏左派知識人の政治理論を歴史研究に取り入れることに、一般に警戒的であったわけではない。モムゼンは帝国主義理論の導入に関しては、ナショナリズム理論とは違って非常に熱心だったからである。

(8) W・モムゼンは、若いころ中世史家ポイマンに興味を懐いていたにも拘らず、ポイマンが熱心に取り組んだ研究課題、つまり前近代のネイション意識をどう考えるかという点には、全然触れていない。前近代のナショナリズムを巡る議論への無関心は、ヴィンクラー、ヴェーラーと比較したモムゼンの特徴の一つである。普通モムゼン世代のドイツ史家は、アンダーソンらを鵜呑みにした近代主義に傾斜するものだが、モムゼンの場合そうした論議そのものに言及しないのである。

(9) W・モムゼンは、帝国主義研究では積極的に「ヨーロッパ中心主義」を批判する立場にあるのに、ドイツ史研究ではその一形態である西欧主義に依拠して「ドイツ特有の道」批判に固執している。モムゼンは、彼の批判するドイツ帝国の反西欧主義が、「周縁」の「中心」に対する憤懣の一形態であったということ、近代ドイツが西欧から差別、抑圧される存在でもあったということ、「ドイツ特有の道」批判も彼が克服しようとする「一面的にヨーロッパ中心主義的な方向性」と類似のものであること、モムゼンの東ドイツ批判も、東ドイツ側から見れば「オッシー」に対する「ヴェッシー」の傲岸不遜に見えるのだということ、正視していないように思われる。

(10) W・モムゼンは「ドイツ社会史派」の一人として「内政の優位」論や紋切型の比較ナショナリズム論に固執する面を有していたが、同時にヴェーラーやマルクス主義史学の描く陰謀説的歴史解釈に対しては、一転して実証性に拘る穏健ぶりを示していた。すでに指摘したアンダーソン、ゲルナー、ホブズボームの理論への距離も、こうしたモムゼンの「実証史



家」としての一面と関係があるのかもしれない。モムゼンはナショナリズム理論とは違って、帝国主義理論の研究には熱心であったが、特定の理論に強く依拠した歴史叙述をしたというわけではなく、思考上の刺戟を得るに留まっていたように思われる。

以上10点に互りW・モムゼンのナショナリズム研究を批判的に検討してきた。蓋し「ドイツ社会史派」の一人モムゼンのナショナリズム研究は、両義的な性格を有していると言えよう。一方でそれは、学問に対する政治の優位を公言し、リベラル・デモクラシーとドイツ・ナショナリズム批判を絶対視する強固な信念が歴史像を規定している面があった。他方でそれは、ヴェーバー研究に代表される実証研究の経験を反映してか、拙速な因果関係説明に慎重で、アンダーソンら1983年世代のナショナリズム研究、ヴェーラーやマルクス主義の経済還元主義には疑問を呈するものだったのである。

## 注

- 1) Wolfgang J. Mommsen, *Der europäische Imperialismus*, Göttingen, S. 7 usw.
- 2) Wolfgang J. Mommsen, *Ägypten und der europäische Imperialismus. Der Aufstieg der ägyptischen nationalen Bewegung*, München 1961. なお前回紀要論文でこの著作をモムゼンの「教授資格論文」と記載したが、これは不正確であったことが判明した。
- 3) Wolfgang J. Mommsen (Hrsg.), *Geschichte und Gesellschaft*, 1. Jg. (1975), Heft 4, *Imperialismus im Nahen und Mittleren Osten*, bes. S. 401.
- 4) Wolfgang J. Mommsen, *Das Zeitalter des Imperialismus*, Frankfurt (M) 1969.
- 5) Heinrich Friedjung, *Das Zeitalter des Imperialismus*, 3 Bde., Berlin 1919–1922.
- 6) Mommsen, *Das Zeitalter des Imperialismus*, S. 101.
- 7) Ebenda, S. 143–151.
- 8) Wolfgang J. Mommsen, *Imperialismustheorien*, 3. Aufl., Göttingen 1987 (1. Aufl., 1977).
- 9) Ebenda, S. 5.
- 10) Ebenda, S. 12 f., 26.
- 11) Ebenda, S. 60 f.
- 12) Ebenda, S. 18, 27–29, 40.
- 13) Ebenda, S. 43.
- 14) Ebenda, S. 49–54.

- 15) Ebenda, S. 58–134.
- 16) Wolfgang J. Mommsen (Hrsg.), *Der moderne Imperialismus*, Stuttgart/Berlin (West)/Köln/Mainz 1971, S. 10 f. (川鍋正敏／酒井昌美訳『帝国主義と国民統合』(未來社、平成14年)。) .
- 17) Wolfgang J. Mommsen (Hrsg.), *Imperialismus. Seine geistigen, politischen und wirtschaftlichen Grundlagen. Ein Quellen- und Arbeitsbuch*, Hamburg 1977.
- 18) Wolfgang J. Mommsen, *Bismarck und der Imperialismus. Zu Hans-Ulrich Wehlers gleichnamigem Buch*, in: Ders., *Der europäische Imperialismus*, Göttingen, S. 78–81.
- 19) Ebenda, S. 82–84.
- 20) Wolfgang J. Mommsen, *Das Ringen um den nationalen Staat. Die Gründung und der innere Ausbau des Deutschen Reichs unter Otto von Bismarck 1850 bis 1890*, Berlin 1993, S. 198–365; Ders., *Bürgerstolz und Weltmachtsstreben. Deutschland unter Wilhelm II. 1890–1918*, Berlin 1995, S. 507–529.
- 21) Mommsen, *Das Ringen um den nationalen Staat*, S. 512 f.